

# 高等学校家庭科「保育」領域の授業実践（1）

他者理解と自己理解を目的とする保育授業

猪野郁子\*・藤田依子\*\*・正村徳子\*\*\*

Ikuko INO, Yoriko FUJITA and Noriko SHOUMURA

A Practical study on Child Development and Education in Senior High School Home Economics Subject(1)

Deepen one's understanding of Others and Oneself in the Practical study on Child Development and Education

[キーワード：保育領域，他者理解，自己理解，模擬体験]

## 1 はじめに

親の自由を奪い自己実現の支障になる、職業を持つ（継続する）ことに障害となる、一人の子どもを成長させるには多額の費用がかかる、子育てするに十分な住居が整備されていない等々は、若い親たちを「子どもを持つこと」に消極的にし、子育てから遠ざける結果となっている<sup>1) 2)</sup>。

さらに、子どもたちの中に存在する陰湿ないじめにみられるように、異質を嫌うばかりでなく、人間関係にうまく対応できない子どもたちが増えている。これは、言い換えれば、親自身が感情や欲求をコントロールする能力に欠けており、教育力も低下させているということであり<sup>3)</sup>、それはまた、自分より幼き者、弱者にどのように接すればよいか、が学習できていない大人が増えているということである。

このことは、我が子を遺棄虐待する親の増加と結びついており<sup>4)</sup>、さらに、地域の学習力の低下ともつながっている。親にならない者（親になることを選ばなかった者）は、次の世代がどのように育っているか（育てられているか）に無関心であるということである。

高等学校家庭科の保育領域では、子どもが心身とも健やかに生まれ育つこと、そのための母体の健康、親の役割の重要性（特に、母性父性の育成）、子ども（乳児）の発達等に重点を置いて男女共修で教育されている。最

近母性喪失からくる子どもの不幸な状態が目立つことから、特に「親性」が強調されている。

筆者らは、最近、思春期青年期まったただ中にある生徒に、「親性準備」として保育領域を位置づけることに疑問を感じている。その理由の一つは、学習してから実際に親になるまでの時間が長くなってきていること、2つ目は、生き方が多様化しており全ての子どもが親になるとは限らないこと（高校生の中には、はっきりと結婚・出産を否定する生徒も見られる）、3つ目に、思春期青年期を乗り越えられない子どもが増えてきており、自分自身が親との関係に不安定であること等によっている。さらに、「保育」というと、女性の仕事とする考え方がいまだ強く、「親準備性」を強調することは、「母性」を強調することになり、女子生徒のみ学習すればよいとする男女共学の精神からはずれる意識が生徒の中に（いや、学校教育のなかに）存在することも見逃すことはできない。

以上の点から、保育領域の目的は、この社会を構成するいろんな世代の人達を理解し、振り返って自分を理解する、中でも自分より幼き者、弱者への理解を高め、彼らと共存し、彼らが「より人間らしく」「よりよく生きていく」ために、自分に何ができるかを考えるきっかけを作ることではないかと考える。

では、どのように展開するとよいのであろうか。

人間の生活そのものを対象とする家庭科の中で、保育

\* 島根大学教育学部

\*\* 島根県立松江工業高等学校

\*\*\* 島根県立松江東高等学校

領域はその「人間」そのものを対象とする領域である。

人間は、肉体と精神と社会性を持っており、常に発達する存在である。辰野は「人間の発達を誕生から死に至るまでの過程と考えるならば、乳幼児から成人レベルに至るまでの『上昇的・進歩的発達』と老年期に向かっている『下降的・退歩的発達』とが存在する。例えば、体力や記憶力が歳とともに徐々に衰える現象は、個人差はあるものの共通である。したがって、広い意味の発達は両者を含むものである。」と述べている<sup>5)</sup>。しかし、自分が通ってきた段階の状況を振り返り、行く先の状況の理解を机上で行うことは難しい。

そこで、「乳幼児と触れ合う」ことが強調される。ところが、高校生の近辺には乳幼児は少なく、日常触れ合う機会はほとんどないと言ってもよい。それでは、保育所を訪問し乳幼児と触れ合う時間をとることができるかと言えば、現行のカリキュラムの中では不可能に近いのが現実である。

辰野が言うように、上昇的発達と下降的発達には共通の事象があることから、1) 下降的な状況を実体験することから上昇的状況を理解することはできないか。また、保育領域を他者理解と自己理解を目的とする学習と位置づけ、2) 実体験からその目的が得られないか。という仮説を設定した。

つまり、下降的発達として「高齢者の能力の低下状態を実体験する」という体験学習を組み入れた保育授業を行い、乳幼児と高齢者への興味・関心を高めるとともに他者理解と自己理解をすすめるかを検討することとした。

## 2 方法および対象

### a 授業研究

「人間の発達は一生行われる」という視点で、保育の授業の中に「高齢者」を取り入れる授業を行うクラスと行わないクラスを設定した。高齢者を取り入れたクラスでは、VTR「シニア体験団」の視聴と高齢者の疑似体験を行った。

学習指導案は次の通りである。

#### 《学習内容》

乳幼児の発達・・・人間の発達

#### 《学習目標》

- 1 人間は一生発達し続ける存在であることが理解できる。
- 2 高齢者の身体的・精神的な面を理解し、高齢者

に対してどのように接するべきか考えることができる。

3 自分の高齢期を充実させるためには、生活設計が重要なことが理解できる。

#### 《学習展開》

生徒の学習活動	指導上の留意点
人間の発達の特徴について知る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発達についての定義づけを明確にする。</li> <li>・発達は、一生続く全ての変化をいうことを理解させる。</li> </ul>
ビデオ「ぼくらはシニア探偵団」を視聴する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・シニア体験を模擬体験させる</li> <li>・高齢者の生活の実態について知らせる。</li> <li>・自分の高齢期を充実させるためにどうすべきか考えさせる。</li> </ul>
実際にシニア体験をする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・手首・指にテーピングを巻く。</li> <li>・カップのお茶をスプーンで飲む。</li> <li>・お年寄りのための持ちやすいスプーンを使ってみる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実感を持って高齢者を理解する。</li> <li>・全ての高齢者の体が動きにくくなるのではないことを理解する。</li> <li>・遊びにならないように。</li> <li>・体の不自由な人のための便利な道具を知る。</li> </ul>
本時の感想を書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーピングを巻いたままで書く。</li> <li>・書きたいことが十分に書けるように配慮する。</li> </ul>

### a-1 授業観察

8クラス中3クラスで高齢者を取り入れた授業を行ったが、そのうちの1クラスを継続観察した。

### a-2 授業後感想文

授業終了後、その日の授業に対する感想文を書かせた。

### b 意識調査

生徒たちの乳幼児や高齢者についての触れ合い経験の有無、興味・関心と子育て観、保育学習についての意識を見るために質問紙調査を実施した。

この調査は、保育学習を始める前（事前調査）と2学期最後の授業（事後調査・・・本来保育授業の最後に行う

ものであるが、時間の都合でこの時期に行った。)の際に行った。

事後調査には、事前調査に加えて、自己理解と他者理解を見る項目を加えた。

乳幼児・高齢者への興味・関心、子育て観、自己理解と他者理解については、「非常にそう考える(思う)」から「全くそう考えない(思わない)」の4段階評価を求めた。

本報告では、この意識調査の結果を中心に行う。

### c 対象

松江市内にある普通高等学校(県立)の2年生8クラスのうち3クラスでは、保育学習に高齢者を取り込んだ授業を行い(G1)、残り5クラス(G2)は保育学習のみを行った。また、3クラスの1クラスで継続授業観察を行った。意識調査は全クラス実施した。2年生総数332名、男子生徒165名、女子生徒167名である。2年生の家庭科は全て一人の教員によってなされている。

研究の期間は、平成7年10月から12月である。

## 3 結果と考察

### (1) 乳幼児・高齢者とのふれあい実態

生徒たちが乳幼児や高齢者とのような触れ合いをしてきているのかみたのが、表1である。

高校生は、7人に6人の割合で乳幼児との触れ合い経験を持っている。中でも女子の比率が高い(男子との間で $\chi^2=24.9 > \chi^2_{0.001}=10.8$  df=1)ことが注目される。

触れ合いの内容としては、一緒に遊ぶことが圧倒的に多い。高校生の身近にいる幼児をみると、7割近くが親類の子ども、3割が近所の子ともで、弟妹は1割にも満たないため、この触れ合いは親戚の子どもとのものが多いと思われる。

中学時代に、保育所や幼稚園訪問で幼児に触れ合う経験をしている生徒もみられるが、その数は2割程度であった。また、乳幼児が身近にいる生徒は3割程度であることから、これらの触れ合いは、日常こまめに行われているのではなく、年に数回程度であると推察される。

次に高齢者との触れ合い経験をみると、8割の高校生は触れ合い経験を持っており、やはりここでも女子生徒の方が男子生徒より有意に( $\chi^2=4.44 > \chi^2_{0.05}=3.84$  df=1)高い割合を示している。地域性が反映して9割が祖父母との交流を持っている。但し、祖父母と同居経験のある生徒は6割強であり、全く同居経験のない生徒が4割近くいることから、この交流は、毎日行ってい

表1 乳幼児・高齢者との触れ合い経験の有無と内容

	人数(%)					
	男子		女子		全体	
	ある	なし	ある	なし	ある	なし
乳幼児	117(76)	38(24)	156(95)	8(5)	273(86)	46(14)
遊んだ	101(86)		149(96)		250(92)	
お世話した	14(12)		55(35)		69(25)	
その他	14(12)		7(4)		21(8)	
弟妹	27(23)		30(19)		57(21)	
親類の子	72(62)		114(73)		186(68)	
近所の子	25(21)		42(27)		67(25)	
その他	20(17)		37(24)		57(21)	
高齢者	111(76)	42(24)	145(95)	18(5)	256(80)	63(20)
話をした	102(92)		136(94)		238(92)	
お世話した	9(8)		26(18)		35(14)	
その他	18(16)		21(14)		39(15)	
祖父母	99(89)		136(94)		235(92)	
近所の人	15(14)		35(24)		50(20)	
施設の人	16(14)		33(23)		49(19)	
その他	7(6)		9(6)		16(6)	

る生徒から年1、2回の交流までを含んでいることになる。施設入所の老人たちとの交流も2割近くみられる。交流の内容は、9割が「話をする」であり、「お世話をする」は1割強であった。

### (2) 乳幼児・高齢者への興味・関心

乳幼児や高齢者への程度の興味・関心を持っているか、各3項目について「非常にそう思う」から「全くそう思わない」の4段階で評価させた。これらを4点満点で点数化し、平均点と標準偏差を算出して事前事後間・G1G2間・男女間の差の検定を行った。

G1は、ビデオ「シニア体験団」の視聴と高齢者の模擬体験を組み入れた授業を行ったクラスである。8クラス中3クラスにおいて行われた。残りの5クラスがG2に属する。

ビデオ「シニア体験団」は、生き生きと元気に生活する高齢者の様子を伝えるものである(生命文化センター制作)。

模擬体験は、手首や指にテーピングを行って、お茶を飲む、スプーンで食べる、字を書いてみる等を行うものである。

結果を、表2に示す。

乳幼児への興味・関心について、事前と事後を比較したところ、「乳幼児が好き」という項目では、いずれのグループ間にも有意な差が見られなかった。「乳幼児への触れ合い希望」と「興味・関心」がG1で事後にはより高まり、中でも男子生徒が有意に高くなっていることが注目される。

事後調査でG1がG2より有意に「高齢者が好き」になっているが、事前調査より高くなったとは言えない。

高齢者への興味・関心については、乳幼児の場合にみられるような、G1での顕著な高まりはみられない。但し、事後調査において、G1とG2間でG1がより肯定的であることが注目される。これは、ビデオ視聴や模擬体験の効果といえるのではなからうか。

### (3) 高校生の子育て観

高校生は、子育てをどのように捉えているのであろうか。子育てに関する8項目についての結果を表3に示す。

性別では、「将来子どもを育てたい」と「子どもを育てることにより親も成長する」の2項目でどちらかと言えば、女子生徒が肯定し、「子育ては面倒、面白味がない」を男子生徒の方が肯定している。

G1では、「子どもを育てたい」とする感情は事後に有意に高くなっているが、「子どもは自分の力で育っていく」とばかり言えないのではないかと大人の役割の必要性にも気づいている。さらに、G2では、「子どもは

自分の思うように育てればよい」とは言っておれないこと、「子育てで親も成長する」ことにさらに気づいている。これは、高齢者を組み入れた授業の効果と言うより保育授業全体の効果が現れたと見てよいであろう。

社会は、年齢・性別・状態の異なる人々で構成されている。人は、様々な状態の人と協力しながら生きていくことを学ばねばならない。また、自分の子どもを持つ持たないに関わらず、次世代を育成するという使命も持っている。原らは、母性とか父性にこだわってはいは、固定的な性別役割観を払拭することはできないこと、育児は両性の仕事であり、また、子を持たない者にも責任や役割があることから、この次世代育成力を養成するべきである<sup>6)</sup>と述べている。

保育領域の教育では、親になるための準備教育とともに、次世代育成力を育てるという課題が大きいのではなからうか。

表2 乳幼児・高齢者への興味関心についての事前事後比較

項目	事前調査 ( $\bar{X} \pm sd$ )				事後調査 ( $\bar{X} \pm sd$ )			
	G1		G2		G1		G2	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
乳幼児が好き	2.75±0.96		2.92±0.83		2.93±0.93		2.96±0.85	
乳幼児に触れ合いたい (一緒に遊ぶ、お世話をする)	2.45±0.92	3.03±0.91	2.65±0.72	3.18±0.85	2.55±0.87	3.28±0.85	2.68±0.82	3.23±0.79
乳幼児に興味関心ある	1.09±0.73	2.86±0.93	2.10±0.83	2.87±0.95	2.30±0.86	3.12±1.00	2.30±0.85	3.02±0.89
高齢者が好き	2.23±0.98		2.24±0.94		2.49±0.92		2.35±0.89	
高齢者に触れ合いたい (一緒に話す、お世話をする)	1.71±0.73	2.71±0.94	1.84±0.70	2.64±0.98	2.11±0.71	2.83±0.97	2.03±0.77	2.66±0.89
高齢者について興味関心ある	2.38±0.84		2.26±0.72		2.50±0.71		2.29±0.68	
高齢者に触れ合いたい (一緒に話す、お世話をする)	2.08±0.86	2.65±0.73	2.09±0.63	2.42±0.76	2.26±0.71	2.72±0.64	2.14±0.66	2.43±0.67
高齢者について興味関心ある	2.15±0.81		1.98±0.79		2.32±0.75		2.08±0.81	
	1.78±0.66	2.59±0.82	1.78±0.69	2.31±0.78	2.08±0.74	2.72±0.85	2.02±0.68	2.43±0.80
	1.78±0.66	2.48±0.78	1.81±0.77	2.16±0.78	2.03±0.66	2.59±0.74	1.98±0.79	2.17±0.82

\*  $P < 0.05$

\*\*  $P < 0.01$

\*\*\*  $P < 0.001$

(4) 他者理解

事後調査において、事前調査の項目に、保育学習の大きな目的であるとする他者理解と自己理解をみる各6項目を追加した。目的を明確にするために、各項目に「保育学習をすることにより」という枕詞をつけた。

他者理解では、他者を乳幼児とする場合と高齢者とする場合に限定し、存在と周りの人との関わりに関する心情的な内容の項目である。

これら6項目について、どの程度肯定しているかを4段階評価で求め、G1とG2間並びに男女間での差の検定を行った。結果は、表4である。

G1とG2のグループ間では、「乳幼児も人権を持った存在」と「高齢者も発達し続ける存在」の2項目で、高齢者を取り入れた学習をしたG1がより肯定をしている。男女間では、男子より女子がこれらの項目を肯定し、

女子の中では、G1の女子が肯定している。

これらの結果は、高齢者を組み入れた授業の効果なのか、保育学習そのものの効果なのか断定することはできない。が、女子の効果が大きいことは、女子の方に保育授業への興味・関心が高いことが影響していると考えられよう。

(5) 自己理解

自己理解については、自分をどの程度見つめているかをみようと。保育学習を進める過程で、どの程度考えるようになったかを、6項目について求めた。他者理解と同様4段階評価をさせ、グループ間並びに男女間で差の検定を行った。結果は、表5である。

保育学習を行う過程でこの6項目中よく考えるようになった項目は、「避妊・中絶」に関することであり、次

表3 子育て観についての事前事後比較

項目	事前調査 (X̄±sd)				事後調査 (X̄±sd)			
	G1		G2		G1		G2	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子	男子	女子
将来子どもを育てたい	2.99±1.44		3.04±0.88		3.24±0.82		3.11±0.88	
	2.60±0.99	3.34±0.96	2.82±0.96	3.32±0.84	3.03±0.75	3.43±0.94	2.86±0.80	3.35±0.90
子どもは子ども自身の力で育っていくもの	2.73±0.82		2.55±0.87		2.35±0.75		2.47±0.75	
	2.78±0.80	2.68±0.84	2.54±0.80	2.57±0.93	2.31±0.74	2.39±0.76	2.43±0.76	2.51±0.75
子どもは、自分の思うように育てればよい	2.09±0.79		2.07±0.81		1.96±0.75		1.93±0.80	
	1.96±0.78	2.21±0.79	2.03±0.84	2.12±0.77	1.95±0.89	1.98±0.62	1.98±0.85	1.88±0.74
子どもを育てるのは面倒、面白くない	1.73±0.77		1.77±0.74		1.64±0.74		1.64±0.65	
	1.91±0.74	1.56±0.76	1.88±0.82	1.67±0.65	1.83±0.78	1.46±0.66	1.75±0.68	1.53±0.61
子どもを育てることにより親も成長する	3.29±0.71		3.27±0.66		3.38±0.61		3.40±0.68	
	3.05±0.69	3.51±0.66	3.08±0.64	3.45±0.62	3.20±0.57	3.56±0.61	3.18±0.71	3.62±0.56
子どもは大人の言うことに従うべき	2.11±0.79		2.21±0.86		2.12±0.71		2.19±0.85	
	2.20±0.87	2.04±0.71	2.28±0.85	2.14±0.87	2.26±0.77	2.00±0.63	2.23±0.90	2.16±0.80
子育ては毎日同じことの繰り返し	2.02±0.81		2.00±0.83		1.98±0.81		2.03±0.89	
	1.90±0.81	2.13±0.80	2.12±0.81	1.88±0.84	2.10±0.83	1.87±0.77	2.03±0.90	2.04±0.88
子どもを育てることは大変	3.71±0.59		3.75±0.53		3.72±0.56		3.77±0.49	
	3.70±0.57	3.72±0.62	3.72±0.55	3.78±0.52	3.71±0.49	3.72±0.62	3.70±0.59	3.84±0.36

\* P<0.05    \*\* P<0.01    \*\*\* P<0.001

いで「妊娠・出産」についてである。反対に、自分が高齢になったときや親が高齢になったときのことはなかなか考えられないといえる。

ここでは、グループ間に差異はみられなかった。

男女間では、「妊娠・出産」「避妊・中絶」「子育て」の3項目でG1の男女間で有意差がみられる。これらの項目は、女子の方がより身近な問題であるからであろう。

高齢に関する2項目で女子のグループ間で差異がみられた。これは、学習の効果とみてよいのではなかろうか。

自己理解をみる6項目の肯定度は、他者理解の6項目の肯定度に比べて低い。この青年期前期という自分自身が揺れ動いている難しい時期であることを考えると、自己理解をどこまで求めるのか今後研究の必要があろう。

#### 4 要約

高校家庭科の男女共修が始まって3年目を迎えているが、男女ともに興味・関心を持たせる授業内容の検討が急務になってきている。

従来親準備性に焦点を当てて教育されていた保育領域に、「人間の一生」という視点を導入し、生徒の自己理解と他者理解を深めることを目的として高齢者理解を組み入れた授業を行った。

ここでは、生徒の乳幼児や高齢者への意識が授業後どのように変化したか、自己理解や他者理解を進めることができたかを中心に考察を行った。結果は次の通りである。

1) 乳幼児との触れ合い経験は、7人に6人と多くの生徒が持っており、中でも女子生徒に有意に多くみられた。

2) 高齢者との触れ合い経験は、乳幼児の場合に比べて少ないが、それでも8割が持っており、ここでも女子生徒が有意に多かった。

3) 乳幼児への興味・関心は、男子より女子に、触れ合い経験のない者よりある者に、近くに乳幼児がいない者よりいる者に興味・関心が有意に高かった。

4) 高齢者への興味・関心についても乳幼児の場合と同様の結果がみられた。

5) 男子より女子に、触れ合い経験がない者よりある者に、子育てへの希望と子育ての親へのプラスの効果を認めていた。

6) この領域の授業が一定期間終わった段階の生徒の意識は、高齢者を取り入れた授業を行ったグループ(G1)に、乳幼児への関わ

りと興味が増していた。

7) ところが、高齢者については、高齢者を取り入れた授業をしなかったグループ(G2)に、高齢者との触れ合いや興味を示す者が増えた。

8) 子どもを育てたいとする希望は、G1では事後高まり、子どもの成長にいろんな人の力が必要であることへの理解が高まっている。G2でも、子育ての効用を認める生徒が増え、子育ての楽しさを認識する者が増えている。

9) 他者理解は、G1、G2とも女子生徒の方がよくできている。高齢者でも発達し続ける存在であるという理解はG1の方が有意にできている。

10) 自己理解も、女子生徒の方ができている。高齢になったときの理解は、やはり授業に高齢者を取り入れたG1が有意にできている。

以上である。

発達は一生涯を通じて行われること、それ故高齢者も発達している存在であるが、失われていく能力や他の能力との関係で十二分に発揮できないことを学ぶことは、乳幼児の上向きな発達を理解するに役立つのではないかと考えた。

表4 他者理解

項目	G1 ( $\bar{X} \pm sd$ )		G2 ( $\bar{X} \pm sd$ )	
	男子	女子	男子	女子
乳幼児には周囲の人との関わり重要	3.62±0.59		3.63±0.59	
	3.50±0.62	3.74±0.53	3.60±0.62	3.66±0.57
乳幼児の存在は私たちが和ませている	2.96±0.76		2.83±0.79	
	2.73±0.73	3.16±0.73	2.71±0.83	2.95±0.74
乳幼児も人権を持った存在である	3.45±0.67		3.26±0.77	
	3.35±0.68	3.54±0.66	3.17±0.78	3.35±0.76
高齢者は私たちが触れ合いたいと思っている	3.16±0.75		3.07±0.80	
	2.91±0.76	3.39±0.67	2.93±0.88	3.20±0.70
私たちは高齢者から得るもの多い	3.01±0.65		2.85±0.76	
	2.91±0.69	3.10±0.61	2.84±0.79	2.86±0.74
高齢者も発達し続ける存在である	2.80±0.77		2.60±0.81	
	2.61±0.76	2.96±0.74	2.45±0.89	2.75±0.70

\*  $P < 0.05$     \*\*  $P < 0.01$     \*\*\*  $P < 0.001$

つまり、その底に秘められた力を持つがまだ何があるのかははっきりしていない（上昇的な）乳幼児と、秘められた力がいっぱいあったのだけどそのまま残っているとはいえない（下降的な）高齢者は、ある時期をみれば、同じ行動を行っている。例えば、いまだ腕・手・指の運動発達や目と手の協応動作が十分に発達していない乳児は、スプーンにすくった食べ物を口に持ってくるのは一仕事である。高齢者は、腕や指に麻痺があったり、視力の低下があって、やはり食べ物を口に持ってくるのが一仕事の者もいるというように。

なぜそのような行動になるかという原因は違っても、その行動自体は同じであるとみてよいのではないか。そうであるとするならば、乳幼児に触れ合う機会がなく、理解が難しいとすれば、高齢者に触れ合うことや体験をすることによって乳幼児の行動の理解を促すことができないだろうか、ということである。

今回の研究では、高齢者を取り入れたクラスで乳幼児への理解と子育てへの希望を高めた。しかしこれは高齢者を学習したからなのか、保育の学習そのものがそれらを促したのかを明確にすることはできない。が、何らか

の効果をもたらしたのではないかと考える。

現在、人間不信や人間関係の希薄さがいわれている。家庭科は、人間の生活を学ぶ教科であり、保育領域は、まさに「人間」そのものを学ぶ領域である。人間とは、年齢や発達段階によって「違う」状態になること（それが発達すると言うことであるが）、われわれは多くの世代と交わりながら生活していること、それ故、異世代を理解することが必要であること等を学ばねばならない。それが、他者理解であり自己理解であろう。

牧野らは、親になることへの準備状態の形成要因として最も影響があるのは性差であるとし<sup>7)</sup>、平井は「子ども好き」という感情を育てること、そのために乳幼児と触れ合う機会を増やすことが重要であると述べている<sup>8)</sup>。本研究でも、乳幼児高齢者とも男子生徒より女子生徒に理解されていたが、保育は両性の仕事とする認識が男性にも高まっている現状<sup>9)</sup>から、次世代育成力を高める方法を検討する必要がある、触れ合い経験をどのように求めていくか検討せねばならない。そのために、保育学習をどのように展開すればよいのであろうか。今後の課題としたい。

最後に、本研究にご協力くださいました学校関係者に厚くお礼申し上げます。また、ご助言いただきました教育学部多々納道子教授にお礼申し上げます。

表5 自己理解

項目	G1 ( $\bar{X} \pm sd$ )		G2 ( $\bar{X} \pm sd$ )	
	男子	女子	男子	女子
青年期にある自分自身の体の変化について	2.08±0.65		2.00±0.64	
	2.16±0.71	2.01±0.59	2.04±0.65	1.96±0.64
避妊・中絶に関することについて	2.55±0.71		2.70±0.76	
	2.36±0.75	2.72±0.62	2.69±0.78	2.71±0.74
妊娠・出産に関すること	2.55±0.65		2.54±0.81	
	2.33±0.60	2.75±0.63	2.46±0.78	2.63±0.84
子どもの育て方について	2.28±0.72		2.31±0.71	
	2.15±0.79	2.40±0.63	2.27±0.73	2.34±0.70
自分の親が高齢になったときのことについて	2.29±0.69		2.20±0.74	
	2.16±0.69	2.40±0.67	2.26±0.73	2.14±0.76
自分自身が高齢になったときのことについて	2.08±0.77		1.94±0.78	
	1.98±0.85	2.18±0.67	2.02±0.81	1.87±0.76

\* P&lt;0.05 \*\* P&lt;0.01 \*\*\* P&lt;0.001

## 参考文献

- 1) 女性の生活意識に関する調査, 生命保険文化センター, 1992
- 2) 厚生白書 平成7年度版, 厚生省, P20, 1995
- 3) 子ども白書 '96年版, 草土文化, pp82-83, 1996
- 4) 斎藤学: 児童虐待, 金剛出版, 1994
- 5) 辰野千寿: 心理学, 日本文化社, 1995
- 6) 原ひろ子, 館かおる編: 母性から次世代育成力へ, 新曜社, 1991
- 7) 牧野カツコ, 中西雪夫: 高校生の「親になることへの準備状態」と保育教育(第2報), 日本家庭科教育学会誌第32巻第2号, p58, 1989
- 8) 平井信義: 母性愛の研究, 同文書院, 1976
- 9) 夫婦の生活意識に関する調査, 生命保険文化センター, P48-51, 1995